



## 2. 隠蔽の技法

Melville の諸作品の中には全貌の掴めぬままミステリー仕立てで物語が進行し、登場人物間にあれこれ憶測が乱れ飛んだ末、最後に謎解きのなされる構成の作品がある。例えば “That moment, across the long-benighted mind of Captain Delano, a flash of revelation swept, illuminating in unanticipated clearness his host’s whole mysterious demeanor, with every enigmatic event of the day, as well as the entire past voyage of the *San Dominick*.”<sup>注7</sup> 「その瞬間、今までずっと五里霧中だったデラノ船長の心に啓示が閃いて、滞在している船の主の得体の知れぬ態度全体が、その日のあらゆる謎めいた事件と、サン・ドミニック号のこれまでの航海全体を含め、思いもかけぬ明確さで照らし出された」というアメリカ人船長、Captain Delano が反乱奴隷の手からスペイン人船長を救う中編、「ベニト・セレノ」(“Benito Cereno”) や、夜中にテーブルの中から聞こえてくる “Tick! Tick!” 「カチカチ」という “a strange, inexplicable sound”<sup>注8</sup> 「不思議な、説明不能な音」の正体が、材料となったリンゴの木に産み付けられてから “after one hundred and fifty years’ entombment”<sup>注9</sup> 「150年も埋葬されていた後で」 やっと孵化した虫がたてる音であった、と最後に判明する短編、「リンゴ材のテーブル」(“The Apple-Tree Table”) がそれに相当する。

その一方、Melville は今現在語られている問題の再認識と謎解きをむしろ読者に委ね、敢えて語り手自ら真相をつまびらかにしないという芸術的なテクニックを用いる作家としても知られている。例えば「魔の群島」(“The Encantadas, or Enchanted Isles”) に於いて、無人島に独りとり残された混血の寡婦、Hunilla の悲劇を物語る際、“The half shall here remain untold. Those two unnamed events which befell Hunilla on this isle, let them abide between her and her God.”<sup>注10</sup> 「ここでは事件の半ばは語らずにおこう。つまり、この島でウニヤにふりかかった語られざる二つの事件については永久に彼女と彼女の神のみが知るものとして触れずにおこう」とするし、『白鯨』第54章、「タウン・ホー号の物語」(“The Town-Ho’s Story”) で Steelkilt が船長に自分を鞭打つ事を思いとどまらせた鍵となる重要な発言は “inaudible to all but the Captain”<sup>注11</sup> 「船長にしか聞こえない」として記されず、『タイピー』(Typee) においてはタイピー族の人肉嗜好の噂に対し、遂に主人公 Tommo によりその真偽が確認されることはなく、「書記バートルビー」(“Bartleby, the Scrivener”) では、終いまで読んでみたところで Bartleby の身元がはっきりと明かされることもない。更に『ビリー・バッド』第22章でヴィア艦長(Captain Vere) が収監されている Billy を訪ね、他人を介さずに面会する場面では、いくら読者が Captain Vere の真意を知りたくとも、“Beyond the communication of the sentence, what took place at this interview was never known.”<sup>注12</sup> 「刑の宣告の伝達以外に、この会見で何が起こったかということは誰にも判っていない」とされている。このような芸術的な「隠蔽」のテクニックも、作品「鐘塔」に関してはまた更に複雑な様相を帯びている様に思える。

作品「鐘塔」の言わんとしている事が読み手に分かり難い原因のひとつには、真実が伏せられていることにより、真実を知らぬ者の側に様々な憶測を呼び、それがまた一人歩きを始めることにより物語をより複雑にしている事情が挙げられる。例えば Melville の他の作品でも「ベニト・セレノ」において、サン・ドミニック号で反乱を起こした黒人の側

が反乱を隠蔽し平静を装っているのに対し、それが見抜けぬアメリカ人船長 Delano は却ってスペイン人船長 Cereno が陰謀を企てているのではないのかという疑念を抱いてさえいるし、「パートルビー」においては、どうにも Bartleby の身元を知る術のない語り手が物語の最後で耳にした、ある “vague report”<sup>注13</sup> 「不確かな噂話」にすぎり、『詐欺師』(The Confidence-Man) 第1章で登場した “a man in cream colors”<sup>注14</sup> 「亜麻色の服を着た男」の身元に対する他の乗客たちの千差万別の憶測が、続く第2章の冒頭で生の声としてそのまま列挙されている。ここで注意しなければならないのは、真実を明らかにせず敢えて伏せたまま曖昧にしておくことと、真実が明らかにされないのをよいことに単なる憶測を敢えて真実だと決めつけることは全く別物だということである。そのことに気がつかないこの「鐘塔」という作品の本質を大きく取り違える恐れがある。Melville の他の作品でもこの類例が見られ、例えば『ビリー・バッド』における “News from the Mediterranean”<sup>注15</sup> 「地中海便り」という見出しで当時の海軍の週報に載った Billy の実像を大きく歪めて伝えている記事がその代表として挙げられるが、「鐘塔」中の Bannadonna により鑄造された鐘の傷の隠蔽もこれに相当する様に思える。その意味でも「鐘塔」はまさに「隠蔽」“conceal” [176] がテーマの作品だと言えるのである。

### 3. Bannadonna の隠蔽

Dillingham は “Melville’s language in describing Talus is carefully chosen to suggest that the creature is more than merely a robot.”<sup>注16</sup> 「自動人形タロスを描写する際のメルヴィルの言葉遣いはこの創造物が単なるロボット以上のものだ」と推測されるよう注意深く選ばれている」と言い、例えば “Strange sounds, like ‘half-suppressed screams and plainings,’ seem to issue from him.”<sup>注17</sup> 「彼から発せられる様に思われる『半ば押し殺した叫び声、呻き声』といった奇妙な音」や “When the chief magistrate admires the bell as Bannadonna’s masterpiece, a sound is heard from Talus, as if he is jealously objecting.”<sup>注18</sup> 「第一執政官がバンナドナナの最高傑作だと言って鐘を賞賛すると、あたかも嫉妬して反抗しているかのようにタロスから音が聞こえてくる」こと、“When a cup is found in the belfry, the reader is confronted with the possibility that the creature takes nourishment.”<sup>注19</sup> 「鐘楼で茶碗が見つかったとき、読者はこの創造物が食事を執っているという可能性と直面する」ことや “In another place the suggestion is made that Talus has altered his sitting position and again that he is breathing.”<sup>注20</sup> 「他の箇所でもタロスが着座姿勢を変えたり、またしても呼吸しているという仄めかしがなされている」といった例を挙げているが、その点に関する作品中の具体的な記述としては、以下のものが挙げられる。

- (1) But, as the object rose, a statuary present observed, or thought he did, that it was not entirely rigid, but was, in a manner, pliant. At last, when the hidden thing had attained its final height, and, obscurely seen from below, seemed almost of itself to step into the belfry, as if with little assistance from the crane....[176] (その物体が上に昇って行くに連れ、その場に居合わせた一人の彫刻家が、それは必ずしも硬直したものではなく、言ってみれば柔軟なものであることに気づいた、あるいは気づいたように思った。そしてその隠蔽された物がとうとう最後の高みに達

すると、下からおぼろげに見えた感じでは、まるで起重機からの助けも無しにひとりで鐘楼の中へと踏み込んでいった様に思えた。)

- (2) It seemed now seated upon some sort of frame, or chair, contained within the domino<sup>註21</sup>. [177] (それは、今やドミノ仮装衣をまとして一種の台か椅子に腰を掛けている格好になっていた。)
- (3) ...and one whispered to the other, that this cup was just such a one as might, in mockery, be offered to the lips of some brazen statue, or, perhaps, still worse.[177] (この茶碗こそ、あの真鍮製の彫像、いやもしかしたらもっと下等なものかもしれないが、とにかくその唇にふざけ半分には差し出すのに格好の代物ではないかとひとりの執政官がもうひとりに囁きかけた。)
- (4) They even dreaded lest, when they should descend, the mechanician, though without a flesh and blood companion, for all that, would not be left alone.[177] (このまま自分たちが塔を下りていけば、あの機械師が、血肉をそなえた者と一緒というわけではないにしても、とにかく独り取り残されるということはないのでは、とすらふたりは恐れた。)
- (5) “when Haman there, as I merrily call him, — him? *it*, I mean —” [178] 「あのハマーン、私は面白半分で彼のことをそう呼んでいるのですが、彼、といいますか、いや<それ>のことですて…」
- (6) “Hark! is that — a footfall above?”  
 “Mortar, Eccellenza; sometimes it drops to the belfry-floor from the arch where the stonework was left undressed. I must have it seen to...” [180]  
 「しっ! あれは——頭上に聞こえるのは足音か?」  
 「漆喰の落ちてくる音でございます、閣下。アーチの石細工の装いが終わっていないものですから、時折漆喰が鐘楼の床へ落ちてくるのです。仕上げはしっかりやっておくつもりであります。」
- (7) “Hark! — sure we left no soul above?”  
 “No soul, Eccellenza; rest assured, no *soul*. — Again the mortar.”  
 “It fell not while we were there.”  
 “Ah, in your presence, it better knew its place, Eccellenza,” blandly bowed Bannadonna. [180]  
 「しっ! ——上には本当に誰もいないのか?」  
 「誰もいません、閣下。ご安心ください。人っ子独りおりません——またしても漆喰の仕業でございます。」  
 「わしらが上にいたときには、あんなものは落ちはしなかったぞ」  
 「それはもう、御身の前では、身の程をわきまえていたのでございましょう、閣下。」バンナドナは穏やかにお辞儀をした。

これらの記述から伺えるように Bannadonna は自動人形の正体が「純粋な機械」ではな

く、人間（生き物）である事を二人の執政官に知られまい、知られまいと一見振る舞っている様に見えるのであるが、その実、裏を返すと寧ろ単なる「真鍮製の彫像、いやもしかしたらもっと下等なものかもしれない」自動人形があたかも人間（生き物）であるかのようにわざと装っているとも考えられるのである。Bannadonnaが鐘楼落成の当日まで自動人形の正体を明らかにしなかった理由は、実はBannadonnaの隠蔽のこの両義性にあるように思える。Bannadonnaは何故にこのように自動人形の正体がどちらにも取られる様な態度を取り続けたのであろうか？その答えはBannadonnaの死により、鐘楼の上で唯一真実を知ることになる二人の執政官の執った、以後の行動に表れている様に思える。

#### 4. 執政官の隠蔽

定刻の1時を過ぎても約束の鐘が鳴らないことでBannadonnaの身の上に異変を察した二人の執政官は急ぎ鐘楼に駆け登り、そこで「真実」を目の当たりにするが、『白鯨』第54章「タウン・ホー号の物語」において“Tashtego rambled in his sleep, and revealed so much of it in that way, that when he was wakened he could not well withhold the rest”<sup>註22</sup>「タシュテゴは眠っている間に寝言で、その秘密の大半を口走ってしまい、目を覚まして残りの秘密も話さざるを得なくなってしまった」のとは異なり、“Nor to any after urgency, even in free convivial hours, would the twain ever disclose the full secrets of the belfry.” [182]「この二人の執政官はどんなに人からせがまれても、また羽目を外した酒宴の席においてすら鐘楼の秘密を完全に打ち明けようとはしなかった」という。しかも自動人形をめぐる一連の失敗にもかかわらず、いや寧ろそれ以前に鐘の鑄造過程で職人を殺害するという罪を犯してさえいるというのにBannadonnaは“stately funeral” [186]「国葬」の榮譽に浴することになるのは、以下のような事情がその背景にあったからと考えられる。

The casting of such a mass was deemed no small triumph for the caster; one, too, in which the state might not scorn to share. The homicide was overlooked. By the charitable that deed was but imputed to sudden transports of esthetic passion, not to any flagitious quality. A kick from an Arabian charger: not sign of vice, but blood. [176]

このような巨大なものの鑄造は、鑄造した者にとって大勝利と見なされたのみではない。国家自体が黙ってその勝利を分かち合うことを辞すはずがなかろう。人殺しの件は見逃され、慈悲をもってこの件に臨んだ人たちは、その殺人行為を、審美的情熱からの突発的に生じた忘我状態によるものと判断し、極悪非道の性質を帯びたものではないとした。いわばアラビア産の駿馬の一蹴りであり、悪徳の印ではなく、サラブレッドの血統の印というわけであった。

そもそもBannadonnaが時の権力者から鐘塔の設計者に選ばれた経緯は以下のようなものであった。

In firm resolve, no man in Europe at that period went beyond Bannadonna. Enriched through commerce with the Levant, the state in which he lived voted to have the noblest Bell-Tower in Italy. His repute assigned him to be architect.[174]

当時、その堅忍不拔さにおいてこのバンナドンナを凌ぐ者はヨーロッパ広しと言えども一人も居なかった。彼の住んでいた国は、レバント地方との交易によって富を増し、ついにはイタリアー立派な鐘塔を建造しようと票決した。バンナドンナはその世評の故に設計者とされたのである。

ここで問題とされているのは Bannadonna の芸術家としての資質ではなく、むしろその “passion” 「情熱」や “firm resolve” 「堅忍不拔さ」といった「世評」の方で、事実、彼が大衆から支持された理由も “That which stirred them so was, seeing with what serenity the builder stood three hundred feet in air, upon an unrailed perch. This none but he durst do.” [175] 「人々がかくも感動を覚えたのは、空中高く、地上から三百フィートもある、手摺りなしの止まり木の上に平然と立ち尽くす彼の姿を見たからであった。これを敢えてなし得るのは、彼をおいて他にあるまい」と、世間が瞠目するその行動の “serenity” 「沈着冷静さ」に重きが置かれて説明されている。Bannadonna を物語る際用いられる言葉が、世間受けするその行為行動を巡るもので、その芸術には一切関係ないことは注目に値する。鐘の鑄造場面でも “Fearless as Shadrach, Bannadonna, rushing through the glow, smote the chief culprit with his ponderous ladle.” [176] 「シャデラクのごとく恐れを知らぬバンナドンナは灼熱の中を突進し手にした柄杓で最も目に余る者を打ち殺した」と描写され、一步も退かぬその “fearless” 「剛胆な」様子のみが強調されている。どこよりも高い塔、どれよりも大きな鐘を作ろうとする Bannadonna はひたすら、高さ、大きさに拘り、そこから一步も引かぬ剛胆さを示すことにより名声を得、芸術性よりもむしろ塔の高さ、鐘の大きさを彷彿とさせるその創造者の「壮大さ」を示すパフォーマンスで大衆を圧倒してきた様に思える。

そうだとすると、鐘楼の上で二人の執政官が目撃したものが、短編「めでたい失敗」“The Happy Failure” でその語り手が目にする “the box where the coiled anacondas and adders lay”<sup>注23</sup> 「とぐろを巻いたアナコンダやクサリヘビの様にぐるぐる巻になったコイルが入った箱」であったとしたら一大事である。あたかも優れた自動人形が実在するかのように演じてきた Bannadonna の偽装を鐘楼の上で目の当たりにし、全ての真実が明らかになった以上、“The same night, it was secretly lowered to the ground, smuggled to the beach, pulled far out to sea, and sunk.” [182] 「その晩、自動人形は密かに地面に下ろされ、そっと浜まで持ち出され、遙か沖まで引っ張っていかれ、そこで沈められた」理由も頷ける。“great mechanician” [174] 「偉大な機械師」を失った今、二人の執政官はどのような行動を取らなければならないのか？ 「イタリアー立派な鐘塔」に相応しい「偉大な機械師」の「世評」を保つため、急遽今度は自分たちがその偽装に荷担しなければなるまい。以下の記述はその後二人の取ったパフォーマンス及びそれがもたらした効果であったと考えられる。

Certain it is, that an arquebuss was called for from below. And some add, that its report, followed by a fierce whiz, as of the sudden snapping of a main-spring, with a steely din, as if a stack of sword blades should be dashed upon a pavement, these blended sounds came ringing to the plain, attracting every eye far upward to the belfry, whence, through the lattice-work, thin wreaths of smoke were curling.

Some averred that it was the spaniel, gone mad by fear, which was shot. This, others denied. True it was, the spaniel never more was seen; and, probably, for some unknown reason, it shared the burial now to be related of the domino.[182]

火縄銃が下から取り寄せられたのは確かである。その銃声の後、突然主発条が切れる様なビューンという鋭い風を切る音が聞こえたかと思うと、刀剣が束になって舗道の上に叩きつけられるような耳を聳する鋼の音も同時に聞こえ、それらの音が混ざり合って平地にまで鳴り響き、皆が一斉に遙か鐘楼の上を仰ぎ見ると、格子細工を通して幾筋もの薄い煙が立ちのぼっていた、と付け加える者もあった。

撃たれたのは恐怖のために狂ったスパニエル犬だ、と言う者もあれば、またそれを否定する者もあった。確かにその後、そのスパニエル犬の姿を見た者はなく、おそらくは何らかの知られざる理由のため、これから語るドミノ仮装衣の者の埋葬と運命を共にしたのであろう。

一見「ドミノ仮装衣の者」を撃った、ないしはその正体を見て怯えたスパニエル犬を撃つたとされる火縄銃の一件も、実は単なる空砲であり、殊更“Even the ostensible method of destroying Talus — by shooting him — seems more appropriate for the destruction of a man than for a statue or a machine.”<sup>注24</sup>「銃で撃った、という表向きにされたタロスの破壊方法でさえ、彫像や機械を破壊するためというより寧ろ人間を殺すためといった方がより適切だと思われる」様に大衆を導くための演出だと捉えると合点がゆく。もはや中身など問題ではない。肝心なのは中身を装うパフォーマンスの方なのである。“The two magistrates who discover the dead Bannadonna will never reveal anything of what happened, perhaps because it would be too fantastic for the people to believe.”<sup>注25</sup>「死んだバンナドンナを発見する二人の執政官は実際に起こったことを何一つ打ち明けようとしないが、おそらくその理由はそれが誰も信じられぬほどあまりにも奇想天外であるからであろう」とDillinghamは言う。ところが実はそうではなく、「実際に起こったこと」が公表できぬ理由が「誰も信じられぬほどあまりにも奇想天外であるからであろう」と大衆に自ずと思わせるために二人の執政官はわざと公表しないのである。Bannadonnaの自動人形Talusは、失敗したとはいえ、天才の名に相応しい、計り知れないほど複雑で大がかりな、しかも何やら恐ろしい、「誰も信じられぬほどあまりにも奇想天外」な装置であったらしい、という風評さえたてば良いのだ。かくしてBannadonnaは権力の手で作られた「偉大な」芸術家となり、その意味で「国葬」に値する英雄となったのだ。

『白鯨』第32章、「鯨学」(“Cetology”)では「小さな建造物は最初に手がけた建築家が完成させてしまうかもしれないが、大きな建造物、本物の建造物ともなれば、仕上げの笠石を常に後世に委ねるものだ」(“For small erections may be finished by their first architects; grand ones, true ones, ever leave the copestone to posterity.”)<sup>注26</sup>と大事業の達成し難さが述べられている。“To the sound of viols, the climax-stone slowly rose in air, and, amid the firing of ordnance, was laid by Bannadonna's hands upon the final course.”) [175]「弦楽器の演奏に合わせ笠石がゆっくりと空中に昇り、砲声の轟く中、バンナドンナの手により最後の石層の上に載せられた」“Bell-Tower”が、見かけの壮大さとそれに負けず劣らず堂々と振る舞うその創造者のパフォーマンスにより“other birds upon the plain”<sup>注27</sup>「平地の他の鳥たち」からはいかに高く、いかに立派に見えようが、

やはり Melville の目に叶う大事業とは程遠く, “a Catskill eagle”<sup>注28</sup> 「キャツキル山脈の鷲」の目から見れば「本物の建造物」とは到底成り得ないのである。

## 5. Bannadonna と Benvenuto Cellini

かつて Melville が『白鯨』中の “Ahab” と題する章で, その名の船長を描写するのに “like Cellini’s cast Perseus”<sup>注29</sup> 「チェッリーニのペルセウス像の様な」と譬え, 後年, 1857年3月24日にフローレンスを訪れた際, 実際そのペルセウス像を見学し<sup>注30</sup>, 更にその年の11月23日から翌1858年2月23日にかけてミシシッピ川以東の16都市で行われた<sup>注31</sup>という「ローマの彫像」(“Statues in Rome”) と題する一連の講演の中でも再三再四採り上げてきた “Benvenuto Cellini”<sup>注32</sup>とこの「鐘塔」の Bannadonna との関係については Morsberger の研究が良く知られている。

Morsberger によると “a crucial episode in ‘The Bell-Tower’ closely resembles two episodes in Cellini’s career”<sup>注33</sup> 「『鐘塔』における重要なエピソードはチェッリーニの経歴における二つのエピソードと酷似している」とのことで, Morsberger は “Cellini’s casting the statue of Perseus”<sup>注34</sup> 「チェッリーニのペルセウス像の鑄造」と Bannadonna の鐘の鑄造とを対比し, 第一点としてそれぞれの鑄造に難色を示す公爵及び執政官をもものとしめない Cellini と Bannadonna に共通点を見だし, “His arrogant response to the Duke resembles Bannadonna’s superior treatment of his ‘Eccellenza’”<sup>注35</sup> 「チェッリーニの公爵に対する傲慢な応対は『閣下』に対するバンナドннаの見下した扱いに類似している」とし, 第二点として

When Bannadonna’s workmen balked, he rushed “through the glow” and brained the “chief culprit” with his ladle. Likewise, one of Cellini’s frightened workmen complained, “Look you, Benvenuto, you are going to attempt an enterprise which the laws of art do not sanction, and which cannot succeed.” Cellini turned on him in fury and cowed the crew into submission, despite the “glow” of “that awful heat.”<sup>注36</sup>

バンナドнна付きの職人が怯むとバンナドннаは「灼熱の輝きの中」を突進し「最も目に余る者」の脳天を手にした柄杓で打ち割った。同様に, 怯えたチェッリーニ付きの職人の一人が「いいですか, ベンヴェヌートの旦那, あなたは芸術の掟が認めない企てを試みようとしている, それが成功する筈がない」と文句を言うと, チェッリーニはカッとなってその男に向き直り, 「恐ろしい灼熱の輝き」をもものともせず, 自分に従うよう職人たちを脅した。

ことを挙げている。Morsberger は更に続けて “During the casting crisis, Cellini stopped short of murder, but earlier in the *Autobiography* he stabbed to death a man named Pompeo. Pope Paul III, before whom he was charged, absolved him, proclaiming, ‘Know then that men like Benvenuto, unique in their profession, stand above the law....’”<sup>注37</sup> 「この鑄造の危機の間, チェッリーニは殺人を思いとどまるが, 『自伝』のもっと前の箇所ではチェッリーニはポンペオという名の男を刺し殺している。チェッリーニは教皇パウロ三世の前で告発されるが, 教皇は『ベンヴェヌートの様な特殊な職業に携わる者は法を超越しているということを中心しなければならない』と主張してチェッリーニを免責した」

エピソードも紹介している。

確かにお互いが残したエピソードの面では、Morsbergerが言うように、BannadonnaとCelliniの間に極めて近い類似性が認められるものの、ここで問題となるのはCelliniの作品が数百年を経た現在でも優れた「本物の」芸術として広く認められている一方で、Bannadonnaの作品は本当に優れた芸術であったと言えるのか、という点である。Celliniが法王から高い評価を受けたからといって、またそれゆえに罪を犯しても免責されたからといって、単にそれだけでは後世に残る優れた芸術家にはなれなかったのと同様、Bannadonnaが当時の権力者の庇護を受け、いかに大衆に気に入られていようが、ただその点をもってBannadonnaの芸術が真に優れた芸術だと言うことはできない。CelliniにしるBannadonnaにしる、「真の芸術家」であればその点は己自身誰よりも承知している筈で、やはり双方にとって一番問題になるのはその作品の方なのである。

## 6. 傷の象徴

あらゆることが隠蔽されている「鐘塔」の中で、敢えて明らかにされている事柄もある。それはBannadonnaによる鐘の傷の隠蔽とそれがもたらした結果についてである。“he concealed the blemish by some preparation which none knew better to devise” [176] 「バンナドナは誰にも判らぬような調合剤を案出してその傷を隠蔽した」というが、鐘の傷は表面的には隠せてもその脆さは隠しきれず、皮肉にもBannadonnaの国葬で実際その鐘が打ち鳴らされる際、

The mass of quaking metal, too ponderous for its frame, and strangely feeble somewhere at its top, loosed from its fastening, tore sideways down, and tumbling in one sheer fall, three hundred feet to the soft sward below, buried itself inverted and half out of sight.

Upon its disinterment, the main fracture was found to have started from a small spot in the ear; which, being scraped, revealed a defect, deceptively minute, in the casting; which defect must subsequently have been pasted over with some unknown compound.[186]

震える金属の塊は、それを囲う枠組みが耐えられないほどに重く、しかもその頂のどこかが奇妙に脆弱に出来ていて、釣り鐘はその付け根から外れ、横向きにさっと落下した。そしてそのままろくに三百フィート下の草地に転がり落ち、半分ほど逆さに埋まり込んでしまった。

掘り起こしてみると、主な裂け目は鐘の耳にあるほんの小さな箇所から発したことが判った。そしてその箇所を擦ってみると、鑄造の際に出来て、外からは目につかないほどに微少な傷が姿を見せた。この傷は何か得体の知れぬ調合剤で後に塗りつぶされたものに違いなかった。

ということが発覚する。本文中の記述によると鐘塔の時計が1時の鐘を打つ前に“the mechanician must then have hurried to the bell, to give his final touches to its sculpture.” [185] 「彫刻に最後の仕上げを施すためにその機械師は鐘の元に急いだに違いない」と想像され、“True artist, he here became absorbed; an absorption still further intensified, it may be, by his striving to abate that strange look of Una; which, though, before others, he had treated with such unconcern, might not in secret, have been without its thorn.” [185] 「真の芸術家である彼はここで熱中し、ウナの表情の奇妙さを

削り取ろうと奮闘し、それにより熱中の度合いが益々高じたのかもしれない。他人の前では無関心を装いつつも、それが内心苦痛のタネになっていなかったとは言えまい」と推測されている。この推測を更にもう一步推し進めるなら、「真の芸術家」であり「偉大な機械師」でもある Bannadonna が、己が付けた鐘の傷の方には全く無頓着であったとは考え難く、否、むしろ「他人の前では無関心を装いつつも内心苦痛のタネになって」いたのは Una の表情ではなく、必ずや鐘の傷の方である筈で、「真の芸術家」であればあるほど、「偉大な機械師」であればあるほど、刻々と定められた時刻が迫る中、修復しようにも修復出来ないジレンマが Bannadonna を益々追いつめていったに違いない。“By the looser sort, who encamped about the tower all night, lights were seen gleaming through the topmost blind-work, only disappearing with the morning sun.” [181]「鐘塔の回りで徹夜で野営した暇な連中によると、最上階の鏡戸から灯りが洩れて来るのが見え、夜明けとともに漸く消えていった」とあるからには、この修復作業は夜を徹して続けられていた筈で、それまで彼が過ごしてきた“some months of more than usual solitude” [176]「常にも増して孤独な数ヶ月間」も、“those who thought they had some further insight” [176]「深い洞察眼を持っていると自負している人々」が仄めかした様に“not for nothing did the mechanic keep so secret” [176]「あの機械師がこれ程までに秘密を保っているのは余程の故あつてのこと」で、人知れず、傷の修復に向かっていたとは考えられまいか？ 執政官が訝った、偶然鐘楼内に紛れ込んだとされる茶碗の存在も、Bannadonna 自ら説明した通り、正真正銘“to test the condition of metals in fusion” [177]「熔解中の金属の状態を調べるため」であったのだ。世間が抱く壮大なイメージとは相容れないこの Bannadonna の姿こそ、ここで初めて作品執筆当時の Melville 自身の姿と重なってくる様に思える。

「鐘塔」の自伝的背景について Leon Howard は次のように言う。

“The Bell-Tower” was, more probably than any of his other stories, Melville’s commentary upon his own career. As an author, he had created such Frankenstein monsters as Captain Ahab and Pierre, who had seriously damaged his reputation even though they had not slain him as the architect Bannadonna had been slain by his mechanical creature who seemed alive.<sup>注38</sup>

「鐘塔」はおそらく他の作品以上にメルヴィルの自分自身の経歴への批評であったのだ。作家としてメルヴィルはエイハブ船長やピエールといったフランケンシュタインもどきの怪物を作り出し、生きているように思われる自らの機械仕掛けの創造物によって創造主のバンナドナが殺害されたように殺害されることは無かったとはいえ、その怪物どもがメルヴィルの評判を著しく損なってしまったのである。

鐘に刻んだ Una の微笑が他の姉妹たちとは異なり“fatal” [179]「不吉」だと執政官から指摘されたところで、Bannadonna が Una の表情を作り替えようなどとは露ほども思わなかったのと同様、同時代の批評家、例えば Fitz-James O’Brien から自らの作品、取りわけ『ピエール』が“most inexcusable insanity”<sup>注39</sup>「どうにも言い訳の立たない異常さ」を示していると非難され、“Let him diet himself for a year or two on Addison, and avoid Sir Thomas Browne”<sup>注40</sup>「一、二年はアディソンを読んで重い文体をダイエットし、サー・

トマス・ブラウンは避けるように」という “a little wholesome advice may save him a hundred future follies”<sup>注41</sup>「あるちょっとしたためになる忠告が将来の百の愚行から救ってくれるかもしれない」ことを Melville が信じ、喜んでその忠告に従ったとも考えられない。なぜならともにそんなことは真の芸術家としてのプライドが許す筈がないからである。さりとて Bannadonna 同様 Melville も人間, “I’d strike the sun if it insulted me.”<sup>注42</sup>「自分を侮辱する者であればたとえ太陽にでも打ち掛かる」と豪語した Ahab も、結局片足に障害を持つ身では、そのあまりにも大きなプライドは支えきれず、外れた鯨骨の義足でしたたか “groin”<sup>注43</sup>「鼠径部」を打つという無様な姿態をさらしていたのと同様、Bannadonna の “groined belfry” [186]「穹窿形の鐘楼」も傷の部分がもとで外れた鐘の重さを支えきれずに脆くも倒壊する。直そうにも最早直せない Bannadonna の鐘の傷も、Ahab の鯨骨の足も、人間としての限界、弱点を象徴する Hawthorne の「痣」(“The Birthmark”)に相当し、Bannadonna の場合には更に消そうにも消せない弟殺しという重大な罪を隠蔽したカインの烙印にさえ通じるものと考えられる。Melville 自身にとっては “The tension between his profession as a popular author and his sense of himself as a serious artist inevitably placed a heavy strain on his spirit, and certain of the tales he published during this period (‘The Happy Failure,’ ‘The Fiddler,’ and ‘Jimmy Rose,’ for example) shadow forth in their autobiographical implications a frustrated mood of impotence and defeat.”<sup>注44</sup>「メルヴィルは人気作家としての職業と純粋な芸術家であるという自覚との間の緊張により相当な重圧を精神に受けたのであり、(例えば『めでたい失敗』や『ヴァイオリン弾き』『ジミー・ローズ』といった)この時期に出版された幾つかの物語には、それとなく示されている自伝的な暗示にどうしようもない無力感、挫折感の兆しが見える」と Kime が指摘している通り、己のペン一本で家族を支え、養っていかなければならない状況の下、芸術至上主義か？売れる小説か？という選択は人生の重大な岐路に立たされる選択であり、Melville 自身やはり相当な緊張状態に置かれていたことは否めず、そこで些かなりとも売れる小説へ、という誘惑に屈してしまえば、今度はその傷を隠蔽しつつ真の芸術家として生きてゆけるのか？という新たなジレンマに直面することになってしまう。

Una の表情についての執政官の追及に対し、Bannadonna は “a law in art, which bars the possibility of duplicates” [179]「複製の存在を禁じる芸術の掟」なるものを示してみせる。作品は、一度失敗したら、最早やり直しは効かないのである。Bannadonna の鐘の “duplicate”「複製」が1年後、地震により鐘楼共々倒壊してしまうのも、Bannadonna の破滅同様、まこと「真の芸術」の掟からいって “necessity” [174]「必然」の結末であったのかもしれない。

注1 Herman Melville, “The Bell-Tower,” *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*, vol. 9 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*, ed. Harrison Hayford et al. (Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1986), p. 175. 以下「鐘塔」からの引用は全てこの版を用い、頁数は本文 [ ] 内に示すこととする。

注2 “the Dark Ages” とは『研究社新英和大辞典第五版』によると「暗黒時代（西ローマ帝国の滅亡（476年）から紀元1000年頃までのヨーロッパ中世初期の旧称；この期間を知的暗黒時代

と考えたことによる；時には文芸復興期までのヨーロッパ中世全体を指す；cf. Middle Ages)。」

- 注3 Edgar Allan Poe, "Maelzel's Chess-Player," *The Complete Tales and Poems of Edgar Allan Poe*, (New York: The Modern Library, 1938), p. 423.
- 注4 Ibid., p. 424.
- 注5 Herman Melville, *Moby-Dick or The Whale*, vol. 6 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*, ed. Harrison Hayford et al. (Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1988), p. 124.
- 注6 Herman Melville, *Billy Budd, Sailor*. (Chicago: The University of Chicago Press, 1962), p. 69.
- 注7 Herman Melville, "Benito Cereno," in *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*, p. 99.
- 注8 Herman Melville, "The Apple-Tree Table," in *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*, p. 383.
- 注9 Ibid., p. 397.
- 注10 Herman Melville, "The Encantadas, or Enchanted Isles," in *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*, pp. 157-58.
- 注11 *Moby-Dick*, p. 254.
- 注12 *Billy Budd*, p. 114.
- 注13 Herman Melville, "Bartleby, the Scrivener," in *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*, p. 45.
- 注14 Herman Melville, *The Confidence-Man*, vol. 10 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*, ed. Harrison Hayford et al. (Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1984), p. 3.
- 注15 *Billy Budd*, p. 130.
- 注16 William B. Dillingham, *Melville's Short Fiction: 1853-1856*, (Athens: Univ. of Georgia Press, 1977), p. 217.
- 注17 Ibid.
- 注18 Ibid.
- 注19 Ibid.
- 注20 Ibid.
- 注21 "domino" とは『大修館ジーニアス英和大辞典』によると「ドミノ仮装衣（（ずきん付き外套と顔の上半分を隠す仮面から成る舞踏会用衣装）；ドミノ仮装衣着用者；ドミノ仮面。」
- 注22 *Moby-Dick*, pp. 242-43.
- 注23 Herman Melville, "The Happy Failure," in *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*, p. 259.
- 注24 Dillingham, *Melville's Short Fiction*, p. 218.
- 注25 Ibid.
- 注26 *Moby-Dick*, p. 145.
- 注27 Ibid., p. 425.
- 注28 Ibid.
- 注29 Ibid., p. 123.
- 注30 Herman Melville, *Journals*, vol. 15 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of*

*Herman Melville*, ed. Harrison Hayford et al. (Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1988), p. 114.

- 注31 “Notes on *Statues in Rome*,” in *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*, p. 723.
- 注32 Herman Melville, “Statues in Rome,” in *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*, p. 406.
- 注33 Robert E. Morsberger, “Melville’s ‘The Bell-Tower’ and Benvenuto Cellini,” in *American Literature* 44 (1972), p. 460.
- 注34 *Ibid.*, p. 461.
- 注35 *Ibid.*
- 注36 *Ibid.*, pp. 461-62.
- 注37 *Ibid.*, p. 462.
- 注38 Leon Howard, *Herman Melville: A Biography*, (Berkeley: University of California Press, 1951), p. 223.
- 注39 Jay Leyda, *The Melville Log: A Documentary Life of Herman Melville*, 2 vols. (New York: Harcourt Brace, 1951; rpt. New York: Gordian, 1969), p. 466.
- 注40 *Ibid.*, p. 467.
- 注41 *Ibid.*
- 注42 *Moby-Dick*, p. 164.
- 注43 *Ibid.*, p. 463.
- 注44 Wayne R. Kime, “‘The Bell-Tower’: Melville’s Reply to a Review,” rpt. in vol. 3 of *Herman Melville, Critical Assessments*, ed. A. Robert Lee (Mountfield, East Sussex: Helm Information, 2001), p. 376.